

宣教の業としての聖餐 —ジョン・ウェスレーの回心的聖餐論—

坂本 誠

序論

ジョン・ウェスレーが生涯にわたって聖餐を強調したことについては多くの学者も認めることである。ウェスレーは週に3回~4回聖餐に与り、後期においてその数は増していた。恵みの手段としての聖餐は、「できる限り頻繁に」というだけでなく「常に」与らなければならないものであった。ウェスレーの恵みの手段には「敬虔の業」(Works of Piety)と慈愛の業(Works of Mercy)があるが、筆者は聖餐が両者をむすびつけるかけはしであり、換言すれば、自己愛と他者愛をむすびつけるものであることを述べてきた¹。

通常、義認は洗礼と結びつけられる。信仰のイニシエーションとしての洗礼は重要な概念であることには間違いない。ウェスレーの洗礼の教理は、彼の説教、「洗礼について」の中に見ることができる。その中でウェスレーは洗礼に2つの意味をもたらしている。第1は、キリストの死の功績による原罪からの解放、第2に新生によって起こる聖霊による人間の心の内側の洗礼である。心の内側の洗礼を受けた者は「希望と愛に満ちたキリスト者」になる。ウェスレー自身は洗礼を重要な儀式として捉えていた。洗礼を新生を喚起する恵みの手段と同時にキリストに接ぎ木されるイニシエーションである

¹ 坂本 誠、「ウェスレーにおける自己愛と社会的な愛——敬虔の業から慈愛の業へ」、『神学思潮 XV』、日本ナザレン神学校神学研究会、1999年、43-58頁参照。

と捉えていた²。それ故にウェスレーは聖餐を通して人が回心させられる可能性をもっていたとしても、洗礼そのものを無視したことにはならない。むしろウェスレーは、洗礼という恵みの手段を通して伝えられる実質を強調していたことも事実である。ウェスレーは洗礼を新生のしるしと捉えており、上述の引用のように、新生によってどの教派の人数が増加することにより、新生した結果起こる意識的な恵みの受領に興味を持っていた³。

さらに、聖餐を通して我々は神に与えられた恵みを確認しながら、聖化の道を歩むこともウェスレーの主張である。その意味でウェスレーが聖餐を聖化と結びつけたと指摘する学者が多いのも事実である⁴。筆者もこのことに異議を唱える者ではない。

ウェスレーの聖餐を宣教の業として考える場合に、2つの側面がある。一つは回心を与える側面 (converting grace) であり、もう一つは確信を与える側面 (confirming grace) である。

1. ウェスレーは聖餐を真実のクリスチャンになる為の回心を与える儀式としてみた。この意味において聖餐に宣教的な性質を持たせた。ウェスレーにとって聖餐は先行する恵みを失った者や罪が赦されたという確信を失った者が、聖餐を受けることにより、再び先行する恵みを受け取ることができる場であった。また名目的なクリスチャンが聖餐を通して再びクリスチャンの道を歩み続けることができると考えた。これはウェスレーが様々な人々に聖餐の場を開放したこととも関連する。

2. ウェスレーは聖餐を信仰の位置(義認)を永続的に確認する場として考えた。クリスチャンが自分の出発点を確認することは行為義認に陥るのを妨げる。聖化にのみ強調点があると、どうしても信仰が自己の状態や行為に偏り、恵みを受領するという視点がおろそかにされるのではないだろうか。我々

² Works X p.188, "Treatise on Baptism", §I-1, 1756.11.1.

³ Horton Davies, *Worship and Theology in England*, (Eerdmans 1996), p.205. FC.Gill edited, *Selected Letters of John Wesley*, pp.89-91 参照。

⁴ 野村誠、『ウェスレーの宗教思想』、白順社、1998年、131頁。この書にはウェスレーの宗教復興の源が sacrament におけるキリストと人との交わりであることが述べられる。一読を勧めたい。Randy Maddox, *Responsible Grace*, (Kingswood Books, 1994), p.199 等に見られる。

は生涯かけて神の愛を確認する場が必要である。聖餐は生涯繰り返し行われる恵みの手段である。聖餐を受けながら我々は自己の信仰を確認し、聖化の道を歩んでいく。これが漸次的聖化（過程を経た聖化）である。聖餐はそれだけにとどまらず、神の恵みを心に受け、心温まる経験をすることができる場でもある。聖餐は、聖霊によってキリストを我々に現臨させ、「生きているのはもはや私ではありません。キリストが私の心に生きているのです」（ガラテヤ 2 章 20 節）という体験を可能にする。ここにおいて示されるのは人生の変更されたコースであり、聖餐において我々の信仰が変容し、神の像に似たものとされていくことが起こる。

この両者は、ウェスレーにおいては切り離し難い。しかし、筆者はウェスレーの聖餐論を語る場合に、ウェスレーが聖餐を永続的義認の場として捉え、絶えず聖餐式において自分の信仰の位置を確認すると同時に、聖餐に与る者に回心を与える機能を持たせ、宣教的要素を含んでいたのではないかと考える。確かに当時は幼児洗礼を受けた者がほとんどであり、聖餐受領者の中に、厳密な意味で非キリスト者がいたのではないだろう。しかし、ウェスレーの聖餐は、名目的キリスト者(Nominal Christian)が聖餐を受けることにより、もう一度信仰の道の戻り、救いの確信を持ち、真実のキリスト者(Real Christian)となって歩んでいくという側面があったのではないか。

この論文ではウェスレーの聖餐を上記の 1 の部分に限定しながら検証し、ウェスレーが聖餐を宣教の業としていかに展開したのかを検証したい。

1 ウェスレーの宣教の業としての聖餐

ウェスレーは 1725 年にオックスフォード大学に入学するが、ジェレミー・テイラーの見解である「人は自分が救いの状態にあることを決して知ることには出来ない」という思想が以下のジェレミー・テイラーの見解と矛盾するということを語っている。少し長くなるが引用したい。

聖餐においてすべてのメンバーは首長であるキリストとつながっている。

つまり聖霊は私たちが祈り求める恵みを与え、私たちの魂は不滅の本質を持つ種を受け取る。（この後はウェスレーのコメントである）

さて、今や確実に、これらの恵みは私たちが持っているかどうか認識できないような小さい恵みではなく、もし私たちがキリストの内に宿るならば、キリストも私たちの内に宿る。この事は私たちが再び生まれなければそれを経験することはないということである。もし彼（テイラー）の意見が正しいならば、私は大きな間違いを犯してきたことになる。というのはもし私がふさわしく（例えば信仰、謙遜、感謝を持って）聖餐を受けていたならば、私の以前に犯した罪は実際赦されるからである。私が言おうとしていることは、私が再び罪に転落しない限りは、少なくとももう 1 つの世界において、私に対する裁きの中でも復活において救いは保証されているということである。しかし、もし、私たちが救いの状態にいることを確信できないのであれば、毎日喜びではなく、恐れを持って震えながら過ごすことになる。そして私たちはこの世の中で最もみじめな人間である⁵。

ここにはウェスレーにとって、聖餐が、第 1 に信仰者の内に効果をもたらす人に認識可能な恵みの手段であることと、第 2 に罪の赦しを確信できる恵みの手段という積極的な聖餐観が表われている。聖餐を通して信仰者は、この世で実感できる救いの経験にあずかる。ウェスレーは聖餐が悔い改めを含んでいると信じていた⁶。聖餐は自己の本当の姿に気づかせ、悔い改めの恵み (Convincing grace) へもたらす。悔い改めの恵みにより、人は神からいかに離れているかに気づく。人は、真実に悔い改めて、愛において生かされる時にキリスト者は恵みにおいて成長することができる。ウェスレーは偶像礼拝は悔い改めがなければ乗り越えることができないと考えていた⁷。ウェス

⁵ 手紙 to His Mother, 1725.6.18. これはテイラーの謙虚さの教理にウェスレーがコメントしたもの。ウェスレーは謙虚さをもって神を求めるならば、死の瞬間ではなく、生きている間に救いの状態を確認できるというもの。

⁶ 説教 14 「信仰者の悔い改め」三。

⁷ 説教 85 「自分の救いの達成につとめる」二・4。

レーは、聖餐式に自己吟味の意味を持たせ、救いと恵みの体験の頂点的なものと考えていたのである。

筆者の関心は、このような聖餐観がどのような文脈で語られているかということである。ウェスレーのめざしていた聖餐観を考察していきたい。

1) ウェスレーの伝道的聖餐論

a. フェッターレイソサエティとの関係

回心を与える儀式としての聖餐を考察するにあたり、重要になってくるのは、ウェスレーのシュパンゲンブルグとの対話を始めとしたフェッターレイソサエティとの関係である。フェッターレイソサエティはモラヴィア派のロンドンの拠点であった。モラヴィア派は、清い心を持つようになるまでは、誰も聖餐にあずかるべきではないと考えていた⁸。これは静寂主義（救いの確信を得るまで、恵みの手段を使用せずに、神を静かに待つこと）というものである。ウェスレーはドイツから帰国後、同様な考えをフェッターレイソサエティの中に認めたのである。彼らは、キリストのみを恵みの手段と考え、人は疑いの信仰を持っている場合に聖餐を受領してはならないと主張していた。ウェスレーはシュパンゲンブルグとの会話で聖餐等の恵みの手段の使用に関して以下のように語っている。

私は信仰の力について彼が言ったことすべてに同意する。「誰でも」信仰によって「神から生まれた者は罪を犯さない」ことに同意する。しかし、誰でも疑いや恐れを持っていることに責任がある限りは信仰を持ってないということには賛成できなかつたし、信仰を持つまで主の晩餐や他の神の儀式をやめるべきであることにも賛成できなかつた⁹。

救いの全き確信を持つまでは、誰も主の晩餐を受けるべきでないというモ

ラヴィア派の主張に対して、ウェスレーは恵みから墮落した場合に、多くの者が、サタンの策略に陥っていると嘆き、その墮落から逃れられないと思ってしまう。彼らは神の賜物を否定するように説得され、救いの信仰は一度も持たなかつたかのように確信してしまう。その結果、恵みの手段を使用しなくなり、キリストのみを信頼すべきだと考え、あわれな罪人であり続ける¹⁰。このように、キリストのみを恵みの手段としてしまう立場に対して、ウェスレーは以下のように語る。

しかし、ついに一人の女性を発見した。多くの者は（彼らの習慣に従って）彼女には信仰がないことを説得しようとしたが、彼女は彼らが抵抗できない霊によって以下のように答えた。「私が今生きている生は、私を愛し、私にご自身を与えられた神の子における信仰によって生きている。主はパンをさくことにおいて私にあらわれたその瞬間から一度も私を離れなかつた¹¹。」

さらにウェスレーはその事において以下のことを発見したと語る。

この否定できない事実から推量できるのは、信仰を持たない者も主の晩餐において信仰を受け取れるかということである。何故か。(1) 恵みの手段、外的な儀式が存在する。そこにおいて神の内的な恵みが人に伝えられ、救いをもたらす信仰が、それ以前は持っていなくても与えられる。

(2) この手段の1つは主の晩餐である。(3) この信仰を持たない者は、神が制定された主の晩餐または別の恵みの手段を使用しながら待つべきである¹²。(筆者傍線)

以上のように、ウェスレーは、主の晩餐を受けることにおいて、一度信仰の確信がなくした者が再び救いの恵みに立ち返ることができることを発見し

⁸ 日誌 1738.8.12.

⁹ 日誌 1739.11.7.

¹⁰ 日誌 1739.11.7.

¹¹ 日誌 1739.11.7.

¹² 日誌 1739.11.7.

たのである¹³。問題となるのは「信仰を持たない者」がどのような人を指すかということであるが、これに関しては次項で述べる。

1740年になっても、同様な論争は続く。フェッターレインソサエティは聖餐の使用に反対し、聖餐を受ける者を迫害する。これに対してウェスレーは

- 1) 礼典を使用する人は信仰を求めることが大切であること。
- 2) 恵みの手段によって信仰を求めべきこと。
- 3) 未信者に信仰を与える恵みの手段が存在することを語る。それに対してソサエティは、モルターを通して

- 1) キリストが唯一の恵みの手段
- 2) 信仰の程度の相違はない
- 3) 信仰者は儀式を使用する必要はない
- 4) 未信者や確信のない者は恵みの手段を使用すべきではないという反論を行う¹⁴。議論はさらに進むが、ウェスレーは結論として、

- 1) 主の晩餐は人に先行の、義とし、聖化する恵みを与える。
- 2) 主の晩餐は神の恵みを欲するすべての人の為にある。
- 3) 私達は祭壇に、何かを与えようとするのではなく、最善のものを神から受け取る為に行く。
- 4) 人が行うべき唯一の準備は「自分は価値がない」という感覚であるとする¹⁵。

礼典と恵みの手段は回心を与え、信仰の状態の確認を与える儀式であり、ウェスレーが常に求めていた内的宗教を与える。ウェスレーは 1776 年においてもこの立場に立っている¹⁶。聖餐時に、回心体験をしたという事例は母親スザンナにも起こったものである。スザンナは以下のように告白する。「私の息子のホールが、イエス・キリストの体は汝のために与えられたもうと語っていた時……それらの言葉は私の心を打った。私は神がキリストの故に私の罪を赦されたということを知った¹⁷。」ウェスレーは母親スザンナの体験から、聖餐を受けることが、真の信仰をもたらす儀式となり得ることを確信していたのである。

¹³ 同様な例が存在する。日誌 1739.9.20.

¹⁴ 日誌 1740.4.25.

¹⁵ 日誌 1740.6.28.

¹⁶ Irwin Reist, "John Wesley's View of the Sacraments: A Study in the Historical Development of a Doctrine" in *Wesleyan Theological Journal*, Spring 1971. ウェスレーにとって霊的生活はキリスト中心であり、客観的な恵みの手段に焦点があり、可視的教会の中心に位置していた。

¹⁷ J.A. Newton, *Suzanna Wesley*, Epworth Press, 1968, pp.197–198.

b. 真実のクリスチャン

1739年 11月 7日の日誌の中で特に重要なのは、「恵みの手段、外的な儀式が存在する。そこにおいて神の内的な恵みが人に伝えられ、救いをもたらす信仰が、それ以前は持っていないでも与えられる。」という表現である¹⁸。「それ以前に救いをもたない者」とは一体どのような人を指しているのだろうか。これまで保持していた救いの確信という意味なのか。それとも全くキリスト教の福音を知らない人々のことを指しているのだろうか。救いを獲得することについてウェスレーは以下のように語る。

私は以下のように信じる。それを獲得する方法はキリストを待ち、静まることである。つまりすべての恵みの手段を使用することにおいて。それ故に、私は自分に信仰（克服していく信仰 **conquering faith**）がないことを知っている人が教会に行くこと、聖餐を受ける権利があると信じる¹⁹。

ではこの克服していく信仰とは何か。この為には、ウェスレーの言う不信仰の内容を考えなければならない。

ウェスレー研究者、オレ・ボーゲンはウェスレーの語る「不信仰」(unbelief)を定義した。ウェスレーは「不信仰の者は祈り、聖餐を受けるべきでしょうか。その通りである。求めよ。そうすれば与えられる。もしあなたがキリストが罪深い、助けようのない信仰者の為になられたことを知っているならば、パンを食し、杯から飲みなさい」と語る²⁰。(筆者傍線) このことに関してボーゲンは、「不信仰」(Un-belief)は「信仰がない」(Non-belief)のとは異なる。ウェスレーが意味していた「不信仰」は、未だ「征服していく信仰」(Conquering faith)を持っていない人であり、神の恵みが必要であることを知っており、キリストが罪深い、助けようのない人の為に死んで下さっ

¹⁸ 日誌 1739.11.7.

¹⁹ 日誌 1739.12. 31.

²⁰ 手紙 To John Simpson 1774.11. 28.

たことを知っている人のことを言う²¹。この信仰は、「勝利を得る信仰」とも訳せる。克服していく信仰の原文には脚注があり、それは**1738年5月19日**の日記を指している。ウェスレーはそこにおいて、キリスト教の適切な信仰を既に得たと思っはならない。自分は最初、「一般的な従順、神の戒めを守る」ことにおいて救われたと信じていた。しかし、「内的な従順、ホーリネス」という概念はなかったとしている²²。「克服していく信仰」は外的な儀式を守ることによるクリスチャンの確信ではなく、内的に救いの確信に生きること、勝利を得る信仰であり、ウェスレー自身の言葉に換言すれば、「僕の信仰」ではなく「神の子の信仰」であった。

これに関しては、ウェスレーが目指していた**真実のキリスト者 (A Real Christian)** との関係が重要である。ウェスレーは以下のように語る。

私達は自分自身を特定のセクトや党の創設者、首謀者として、立てているのではない。それは我々の考えから全く離れているものである。しかし、名ばかりのクリスチャンであるが、心と生活においては異端である人々を、真のキリスト者、純粋なキリスト教に呼び戻す為の使者であると信じている²³。

ここにはウェスレーの使命が見事に描かれている。さらに**1784年**にされたウェスレーの「なぜ世からさらなければならぬか」という説教の中でも「**22歳**の時に名ばかりのクリスチャンではなく、**真実のキリスト者**になるという確かな解決が私に与えられ」と語っている²⁴。晩年になっても、ウェス

レーは、**真実のキリスト者**になることを願っていた²⁵。ウェスレーには**九分九厘**のキリスト者と**全きキリスト者**の区別も存在するが、聖餐を通して、**真実のキリスト者**、**全きキリスト者**になることをウェスレーは願っていたのである。その為には、自分が**九分九厘**のキリスト者であることを確認すると共に、これまでのキリスト者としての歩みを悔い改め、恵みを受け取り直し、回心して社会に遣わされていくという役割を聖餐に持たせたのである。

当時ウェスレーの周りには**幼児洗礼**を受けて安心しきってしまい、名目上のキリスト者が多かった。さらにクリスチャンになりながらも、信仰が長続きせず教会から離れている人がいた²⁶。ウェスレーの聖餐にはこれらの人々が視野に含まれていたのである。それ故に聖餐を回心を与える儀式として定義することは必要であった。ウェスレーの手紙や著作集には、人々が聖餐を受けて、祝福された例が存在し、積極的な聖餐理解が見られる²⁷。

c. 先行する恵みとの関係

このことに関しては先行する恵みとの関係においても重要になってくる。ウェスレーは聖餐を「先行の、義とし聖化する恵みを伝える手段」として見

²⁵ さらに**1773年6月8日**にミス・カミンスに宛てた手紙の中で、「**真実の聖書のキリスト者**になる」という表現が存在する。手紙 **Letter to Miss. Cummins, 1773.6.8.**

²⁶ **18世紀**初めにはおよそ**17万9千人**の長老派教会員、**5万9千人**の独立教会派（組合教会派）、**5万8千人**の洗礼派教会員、そして**3万8千人**のキューカー教徒がいた。その多くが関心をなくしていた。ロイ・ポーター『**イングランド18世紀の社会叢書・ユニベルシタス (529)**』目録公和、法政大学出版協会、**1996, 260**頁。その他、正規に国教会に登録されていない人、キリストを体験していない人がいたとすれば**幼児洗礼**を受けていない人も多く存在していたのではないだろうか。

²⁷ 日記 **1739.9.20**, 日記 **1766.4.4**, その他の例としては、ある女性が**8年間**病であり弱っていたが、重荷をおった罪人が聖餐を受けたいと望み、彼女の魂に休息を感じた。その瞬間から知識と神の愛が増した。日記 **1766.4.4**。更に**1763年**の終わりにおこったエリザベス・タックの例があげられる。彼女も死の淵にあったが、説教者と会話し、健康が戻った。そしてイースターの日に聖餐を受け、「**義としたのは神である。誰が責めるだろうか**」という声を聞いた。彼女は家に帰り、夫に「今や私の罪が赦された。主が私を愛し、私も主を愛しているので死ぬのは怖くない」と説いたとしている。Works XIV p.263 参照。

²¹ Ole E Borgen, *John Wesley on the Sacraments – A Definitive Study of John Wesley's Theology of Worship –*, (Francis Asbury Press, 1972), pp.199–200.

²² 日記 **1738.5.19**。ウェスレーは父にさらに光を願うなら、主は更に光りを与えられとしている。

²³ Works III, 240–46, *A Preservative against Unsettled Notions in Religion*, (1758). Albert Outler, *John Wesley*, Oxford University Press, 1964, p.20.

²⁴ 説教 **81・二三**, *In What Sense we are to Leave the World* ここにある**22歳**の時は**1725年**のことを指す。通常第**1**回目の回心と言われる年代である。

ていた²⁸。ウェスレーはどのような意味で聖餐を先行する恵みと結びつけたのであろうか。ウェスレーによれば先行する恵みはすべての人に無条件に与えられている恵みであった。もしそうであるならば、先行する恵みを聖餐時に受けるという意味は何なのか。

この点に関して重要な神学者がロブ・ステーブルスである²⁹。ステーブルスはこの点において2つの疑問が生じると語る。まず第1は、先行する恵みは義認の前に存在する恵みであるので、未信者もそれを受け取るように招かれていることを意味していたのではないかという問いである³⁰。第2の問いは、「もし先行する恵みが与えられるなら、そのような人は受けた時点では先行する恵みを持っていないことを意味しているのか」という問いである³¹。ステーブルスは、この点において重要なのはウェスレーの言う信仰の程度（degrees of faith）であると言う。ウェスレーは信仰を段階的に捉える。ウェスレーには有名な九分九厘のキリスト者と全きキリスト者の区別が存在する。さらに、ウェスレーはクリスチャンであっても、先行する恵みを取り去られることがあると考えていた。そのような状態は、具体的には霊的な事柄への飢え渴きがないことを指す³²。しかし、先行する恵みを失った人は、聖餐を通してもう一度先行する恵みを受け取ることができる。その手段が聖餐であった。ステーブルスによれば、ウェスレーは(1)人はいかなる信仰なくとも聖餐に来ることができる。(2)聖餐を効果あるものにするために人は信仰を持たなければならないという両面を説いた。この両者は矛盾するように思うかもしれないが、人は、救いの信仰がなく、外見がどのようなものであれ、ある程度の信仰を保持しているものであり、そのような信仰は「からし種の信仰」として主のテーブルに人をつかせるとしている³³。

²⁸ 説教 16 「恵みの手段」 二・3。

²⁹ Rob L. Staples, *Outward Sign and Inward Grace—The Place of Sacraments in Wesleyan Spirituality*, (Beacon Hill Press of Kansas City, 1991). ステーブルスはこの点に関して1章を割いている。

³⁰ *Ibid.*, p.255.

³¹ *Ibid.*

³² 説教 85 「自分の救いの達成に努める」 三・4。

³³ *Ibid.*, pp.258—259. ステーブルスは3つの恵みを以下のように定義する。先行する

もう一人の神学者はオレ・ボーゲンである³⁴。ウェスレーが聖餐を回心の恵みと見ていることを認める時に問題になるのはウェスレーの強調した先行する恵みとの関係である³⁵。ウェスレーは聖餐において先行する恵み、「救いの最初の実」が伝えられるとした。しかし、このことは先行する恵みをすべての人が持っているという考えと矛盾するのではないか。ウェスレーはこのことにおいてどのような人を対象にしていたのか。3つの可能性がある。第1は、先行する恵みが消えて救いの信仰がある程度なくなっている人。第2はウェスレー自身の言葉によれば、「霊的な感覚が覚まされておらず、霊的な善や悪が認められない」人。第3は、主が与えるものは何でも受け取る用意があり、我々が罪深く、助けようのない状態であるという認識を持っている人である³⁶。確かにウェスレーにとって主の晩餐は罪を抑制したり、罪が赦されたり、神の像において魂を新しくしたいと望む人にとって重要な恵みの手段である。同時にウェスレーは聖餐を回心の恵みとするが、ここにおいて、ウェスレーは新しい領域に踏み出すとし、ウェスレーの回心の恵みとしての聖餐を強調している³⁷。ウェスレーの根拠はどこにあったのだろうか。

ボーゲンはウェスレーの根拠を3つに分けて考える。第1の根拠は、神は自由にその恵みを、様々な恵みの手段を用いて伝えること。第2に主の晩餐は罪に陥った人に対して罪の取り消しを与える。一度信仰を持っていた人に赦しととりなしが与えられるとしたら、より劣った程度の信仰を持った人にも同じことが起こる。第3にウェスレーは経験によって主の晩餐のテーブルで義とされたことを知っていたとする³⁸。

ここにおいてもステーブルス同様、信仰の程度への言及、実際に回心者が与えられたという事実が根拠になっている。ウェスレーは聖餐の機能を再定義し、救いの順序において継続的な恵みをもたらすものとして捉え、神の恵

恵み：罪を抑制する。義とする恵み：罪が赦されていることを示す。聖化する恵み：魂を神の像において刷新する。

³⁴ Ole E Borgen, *John Wesley on the Sacrament*, (Abingdon Press 1992).

³⁵ *Ibid.*, p.184.

³⁶ *Ibid.*, p.195.

³⁷ *Ibid.*, p.197.

³⁸ *Ibid.*, pp.197—198.

みは実際に与えられることを強調した。以上のようにウェスレーは神に対して罪を犯した人に赦しと生きる為の新しい力を与えた。またその赦しは求めている罪人に対しても与えられるとしたとする³⁹。ウェスレーが聖餐に回心の機能を与え、初めの愛に戻ることを強調したことには、当時の名目的クリスチャンに対して初めの愛に戻るというウェスレーのメッセージだったのではないだろうか。ウェスレーにはエピクレーシス（聖霊降臨）の祈りが存在し、神秘的な仕方で真臨在が起こる。神と人との交流をもたらす聖餐がメソジストの聖餐であったのである。

永遠なる御霊よ、来たり給え、救い主のすべての死による功績、すべての彼の受難をもたらし給え。キリストの死の真実の記録者として、今や生きた信仰が付与される。彼の偉大な救いをあらわし給え。我々の心に福音を宣べ伝え給え。キリストの死の目撃者よ、来たり給え、神の記憶をもたらす者よ、キリストを各自と我にもたらすことにより汝の力を感じさせ給え⁴⁰。

一般に先行する恵みは人を義とする恵みに先んじる神の恵みを意味する。先行する恵みは人を救いにもたらす為に備えさせ、導く恵みである。そして先行する恵みは普遍的に与えられている神からの恵みでもある。ウェスレーの視野にはすべての人が入っていたとしても過言ではないのではないだろうか。聖霊は何をもたらすのか。聖霊はキリストの受難の功績を信仰者に伝えるだけでなく、偉大な救いを啓示する。

以上、様々な角度からウェスレーの回心の業としての聖餐を考察してきた。ウェスレーの願いは、人々が救いの信仰を獲得し、聖餐に与りながら、天国への道を真のキリスト者として歩むことであった。当時の人々にとって聖餐は再びキリスト者の道へと戻る場であると同時に、先行する恵みを受け取り

³⁹ Ibid, p.199.

⁴⁰ The Eucharistic Hymn, No16. これはローマのクレメントのリタジーよりとられたもの。Geoffery Waingwright, *Doxology—The Praise of God in Worship, Doctrine, and Life*, Oxford University Press, 1980 参照。

直し、義とする恵みにおいて確信を得る手段であったのである。ウェスレーの立場はアルメニアンとしての立場でもあり、信仰者は責任を持って信仰を維持するために恵みの手段を使用しなければならないものであった。恵みから落ちることがあっても、聖餐は先行する恵みを与える手段であるから、それを受け取り、初めの愛に戻り、信仰生活を歩み続ける。その意味でウェスレーは聖餐を「永続的な信仰義認の場」（常に罪人として主の御前に遡り、主の赦しと愛を受ける場）として見ていたのではないだろうか。ウェスレーにとって聖餐にあずかることは、自分をキリストの前に差し出し、罪人としての自分を見つめ、神の赦しと愛の中に自分を浸すというキリスト者の内的いのちの源泉であったのである。

2 宣教としての聖餐の適用

これまでウェスレーが聖餐を回心を与える儀式として、名目的クリスチャンに対して積極的に用いてきたことを考察してきた。ウェスレーのリヴァイヴァルは礼典的に展開されると同時に福音としての役割があった。

我々はウェスレーの聖餐論をいかに日本において適用していくことができるだろうか。確かに日本においては、「不信仰」「未信仰」以前のキリスト教的背景がない「無信仰」の人々が大部分であろう。特に創造論における創造主としての神概念がない人々が多い。しかしウェスレーは、すべての日本人が先行する恵みを与えられていることは否定しないと考える。そのような状況の中で聖餐を回心の業として提示することは可能なのだろうか。またどのような意味があるのだろうか。日本の教会の現状はどうであろうか。読者には大変申し訳ないが、筆者の出身教会であるナザレン教会を中心に考察していきたい。

1) アメリカナザレンの聖餐理解

ナザレン教会はまもなく宣教 100 周年を迎えようとしている教派であり、アメリカのカンサスシティに総本部がある教会である。アメリカで起きたホーリネス運動によって幾つかの群れが合同してできてきた教派である。ナザ

レン出身のフィッツゲラルドは、博士論文の中で、ナザレン教会と聖餐の関係を述べる⁴¹。ナザレン教会の初期は頻繁に聖餐が行われており、ナザレン教会の創立者であるブリジーも聖餐の重要性を強調した⁴²。しかし、その後、ナザレン教会においては、ウェスレー兄弟の聖餐の讃美歌はあまり知られなかった⁴³。また「ほとんどのナザレン教会はウェスレーの見解である回心の業としての聖餐を知らなかった⁴⁴。」さらに、「ナザレン教会は説教に重きを置いた敬虔さをウェスレーの福音的・礼典的な敬虔の組み合わせとは対照的に保持している」と語っている⁴⁵。この指摘はナザレン教会がウェスレーの神学形成とは切り離された形で教会形成をしてきたという証言でもある。

日本においても状況は同様である。多くの教会において説教が中心であり、聖餐式は年に3回から6回という位置づけであったように思う。最近筆者の教会も含めて月一回の頻度が多くなってきた事実はあるが、最も重要なのは聖餐の意味を受領者がどれだけ理解しているかであろう。

フィッツゲラルドは以下のように結論づける。「ウェスレーはメソジストを設立するために特別な方法を常に強調した。それは相互責任を伴う礼典的な交わりである⁴⁶。」ウェスレーはメソジストソサエティにおいて、互いの責任を重んじながら弟子化の訓練を強調した。組会では相互カウンセリングが行われ、一定の霊的状态を保つ配慮がなされていた。その相互訓練の背後には聖餐があり、それが共同体的な一体感をもたらすと同時に、相互責任を伴う礼典的な交わりが可能であったのである。これは、フィッツゲラルドの論文タイトルである「砂のロープを紡ぐ」ということにも関連する。ウェス

⁴¹ James Nelson Fitzgerald, *Weaving a Rope of Sand: The Separation of the proclamation of the word and the celebration of the Eucharist in the Church of the Nazarene*, UMI Dissertation Service, 1999.

⁴² *Ibid.*, p.212, p.214.

⁴³ *Ibid.*, p.217. 聖餐の讃美歌は最初の讃美歌には著しく欠如している。

⁴⁴ *Ibid.*, p.218.

⁴⁵ *Ibid.*, p.222.

⁴⁶ *Ibid.*, p.231. ウェスレーは働きを保持するためにソサエティ、クラス、恵みの手段への出席が必要であると語った。しかし、ナザレン教会は、ウェスレーの責任ある相互牧会と礼典的交わりの代わりに別のもので代替してしまった。

レーが行ったように言葉と礼典を紡ぐことに失敗することは、聖なる生活に対するウェスレーのアプローチのダイナミックさを失うことになる⁴⁷。言葉と礼典をいかに紡ぐかという視点が現代においては重要なものであり、言葉と聖餐を福音として再提示する試みが欠かせないのではないだろうか。

2) 日本の教会の現状

日本の教会の場合には、聖餐は堅信礼と関連して理解されてきたように考える。意識的に信仰告白をしているか否かを聖餐の唯一の条件としている傾向があるのではないだろうか。現に日本ナザレン教団の幾つかの教会において、幼児洗礼を受けていても堅信礼を受けていない場合は聖餐に与れない。これは自覚的、意識的な信仰告白を強調してきたことと関連する。子どもの倍餐に関しては以下の証言が有効である。

聖餐式がメソジストのチャペルで行われる時には、アングリカンの礼拝式文が讃美歌を歌うことと式文を用いぬ祈りとともに用いられた。準備が出来ていれば子ども達も出席できた。聖餐を信仰を強める礼典であるばかりでなく、回心をうながす礼典でもあったので、悔改めをし、神の意志を求め、これを行おうと欲している全ての人々をゆるした。しかし、彼が未受洗者をも許可したことを示唆するものは何もない⁴⁸。(筆者傍線)

ここでは、メソジストの聖餐に子どもたちも与っていたことが書かれている。未受洗者の許可に関しては明確には判断できないものとして描いている。子どもが聖餐に与るための準備は何かという問題が残るが、子ども達と共に与る聖餐は恵みあふれる聖餐であったに違いない。

ナザレン教会の形成においては、特に説教のみを福音と捉え、説教中心の宣教構造が見られるのは否めない事実である。また、キリストを救い主とし

⁴⁷ *Ibid.*, p.235.

⁴⁸ ジョン・W・クラムメル、「ジョン・ウェスレーの聖餐観」、『ウェスレーの教会論』ウェスレーとメソジズム双書3、日本ウェスレー協会、1967年、37頁。

て既に個人的に受け入れ、救いの確信もあるのであるが、家族から洗礼を受けることを反対されている人々に対してはどうなのであろうか。ウェスレーの回心の恵みを伝える聖餐論から見れば、その人が信仰を持って与りたいというのであれば許可したのではないだろうか。このような方々に対してウェスレーなら何というのであろうか。いずれにせよ、牧師としての配慮がのぞまれるところである。

アメリカ留学中に筆者が出席していた教会では、聖餐において人々を招く場合に、「洗礼を受けた者は」という言葉は聞かなかった。むしろ「信仰と悔い改めをもってのぞむ人は誰でも」という招きであった。礼拝出席人数も多く、出席している人々も多様で、しかもキリスト教的背景がある国家においては、聖餐受領者の条件を広く設定する必要があるのであろう。日本フリーメソジスト教団の聖餐式の招きには「まことに、自分の罪を悔い、隣人を愛し、その聖なる道を歩み、新しい行いをしようと志している者は、信仰をもって今ここに近づき、慰めを得るためにこの聖餐を受け、慎んでひざまずき、へりくだって全能の神に懺悔しなさい⁴⁹」となっている。この招きに「洗礼を受けている方は」という条件を付加するかどうかは、各牧師に委ねられているのが現状かもしれない。

しかし、以上のことを考えると、聖餐に与る条件をもう少し広く定義してもいいのではないかと考える。各教会の教会が幼児洗礼を受けた子どもたちを含めた形で聖餐に与れるならば、その聖餐はさらに輝きを増し、主イエスの臨在において豊かな聖餐に与ることができると信じる者である。

3) 誰が聖餐に与れるのか

人が聖餐にあずかるときにどのような準備が必要なのか。そこにおいて重要なのは「神が喜んで与えるものは何でも受け取りたいと望むこと……自分が全く罪深く、助け手のない状態であること」を自覚している事である⁵⁰。また、「普遍的なきよさへの正直な求めなしでは、私たちが全く助け手のない

⁴⁹ 日本フリーメソジスト教団式文参照。規定において聖餐の資格を洗礼を受けた者と明確に限定している教団も存在する。

状態であることはみられない⁵¹。」ウェスレーは 1740 年 6 月 27 日に以下のように語る。

私は「私を覚えてこれを行いなさい」について説教した。昔の教会では洗礼を受けた者は誰でも日毎に聖餐を受けた。それ故に使徒行伝では「すべての人はパンをさき、日々祈り続けた」のである。しかし後の時代には多くの人が主の晩餐は回心を与える恵みではなく確信を与える恵みであるとした。そして私達の間でも回心し、聖霊を受け、完全な意味で信仰者のみが聖餐を受けるべきだとした。しかし、私たちの経験は、主の晩餐は回心の儀式ではないということが誤りであることを示している。あなたたちがその証し人である。多くの人が、今やあなたたちの神への回心（何人かの人にとっては最初の深い確信）は主の晩餐の時にもたらされたことを知っている。今や、この種の 1 つの例がすべての主張をひっくり返すのである。他の主張の誤りは聖書の教えと例から明らかである。私達の主は、その時まで回心していない人々、「聖霊を未だに受けていなかった人々」（完全な意味においては信仰者でない人々）に対して「主を覚えてこれを行いなさい」と言われたのである。ここにおける教訓は明白である。そしてこれらの方々に主は物素をご自分の手で配られた。ここにも議論の余地のない例が存在する⁵²。

ウェスレーはここで、明確に、聖餐を説教と同じように福音的な回心を与える恵みの手段としている。ウェスレーの聖餐にはどのような人が招かれていたのか。ウェスレーは、以下のように語る。

聖餐は神の恵みが欠けており必要としている者や、赦されたいと望む者や、神の像に似るように魂を新しくしたいという者の為に制定されたものである。……聖餐を受ける時に、どのようなふさわしさも必要ではな

⁵⁰ 日誌 1740.6.28.

⁵¹ 手紙 1746.6.17. Letter to Thomas Church.

⁵² 日誌 1740.6.27.

いが、私達の状態の知覚、罪深さ、助け手のなさの認識が必要である。誰でも自分が地獄に陥ることを知っている人は主が指定されたこの方法や別の方法においてキリストのもとに来ることができる⁵³。

聖餐に招かれている人は、「自分に絶望し、自分の状態から抜け出たいと思っている」という条件である。信仰者は罪に陥ることがあるのであり、恵みの手段としての聖餐を通して、罪ある者も恵みを受け取ることが許されている。誰でも熱心に求める者に聖餐は開かれている。

ウェスレーは **Sunday Service** の聖餐のリタージェーから「聖餐を受ける時に事前に通知する」という礼典法規を削除し、他にも自分が不要と思う条項を削除している⁵⁴。ウェスレーは聖餐に宣教的な目的も付加していたのである。ウェスレーは聖餐に福音的な経験を加味し、恵みは **ex opere operato** に与えられるのではなく、信仰のダイナミックな関係において与えられるとした。

ウェスレーが聖餐受領者の資質を細かく注意しているのは事実である。「信仰、謙遜、感謝をもって聖餐を受けているなら」という条件付きであった。改悛しない人々、罪が習慣的になっている人々に対しては、強い姿勢で資質を問うが、真に悔い改め、罪の赦しを求める人々は、誰でも聖餐を通して、恵みに導かれていく。

人には自分をまず吟味させなさい。聖なる設立されたものの本質と意図を、キリストの死を心から信じているか、もし彼に疑いがなければ、聖餐の杯を飲み、パンを食させよ⁵⁵。

聖餐受領者は、祈祷と自己準備で聖餐に備えることが期待されていた⁵⁶。

聖餐において、牧師は受領者の代わりに以下の祈りをささげる。

心から悔い改め、真実の信仰をあなたにささげるすべての者に罪の赦しを約束される我らの父なる全能の神、我らにあわれみを施したまえ、我々を赦し、罪から解放し給え、すべての善において我々を確信させ、強めたまえ、そして我らを永遠の生命へ導き給え、イエス・キリストの御名によって アーメン⁵⁷

もし私たちが自分が持っている恵みに積極的に応答するならば、さらに豊かな恵みを与えられ、私たちが救いを信じることができるまでさらに前進することが可能である。

結論

以上ウェスレーの聖餐論を宣教的な視点から展開してきた。問題はウェスレーの回りに現代の意味で純粋な求道者がいたかどうかが焦点となってくる。もし存在したとしたら、オープン・コミュニオンを考えていたのであろうか。聖餐を自分の所属する洗礼を受けた教会員だけで行うことを「クローズド・コミュニオン」と呼び、洗礼を受けていればどの教会に属する会員にも開放する聖餐を「オープン・コミュニオン」と呼ぶ。最近では「オープン」という言葉をさらに、洗礼を受けていなくても、キリストを信じる者なら誰でも主の晩餐にあずかってもかまわないと考える教会も存在するようになった。我々プロテスタント教会の聖餐は決してクローズドコミュニオンではない。ナザレン教会においては、カトリック教会において洗礼を受けた者は聖餐を受けることができる。しかし、ウェスレーの場合には「自分に絶望し、自分の状態から抜け出たいと思っている者」という条件つきである。それ故に、ウェスレーの聖餐を受ける条件である者の信仰が、キリスト教的な創造主に対

⁵⁷ Robert W Goodloe, *The Sacraments in Methodism*, The Methodist Publishing House, p. 83. 出版年代不明。

⁵³ 日誌 1740.6.28.

⁵⁴ Maddox (*Responsible Grace*), p. 357. ウェスレーは、39 条の 33 条 (培餐停止を命じられた者を避ける方法について) も削除する。これはウェスレーの意図が罰を与えるというよりも、もう一度聖餐に与えるようにすることに向けられていたことを示している。

⁵⁵ 説教 16 「恵みの手段」 三・11.

⁵⁶ Trevor Dearing, *Wesleyan and Tractarian Worship—An Ecumenical Study*, 1966, p.14.

する信仰であるかということもひとつのポイントとなるであろう。

元来、聖餐は天の晩餐の先取りであり、聖餐を受けることにより、我々が天に属することを確認していくことでもあるから、その晩餐にすべての人は招かれていると言っても過言ではない。この普遍的な招きは、聖餐を福音的で宣教的な出来事とすることも事実である⁵⁸。メソジストの会員は聖餐を受ける時に以下のように祈った。

私たちはこの聖餐のテーブルに自分の義を信じて厚かましくも聖餐にあずかりに来ている者ではありません。ここに来ることができるのは、ただあなたの多くの、そして偉大な恵みによるのです⁵⁹。

聖餐のテーブルとは、メソジストのテーブルのみではなく、主のテーブルを意味する。そこでは主に会うことが起こるのである。メソジスト以外にも主のテーブルは開かれている。ここにはウェスレーの聖餐の開放性が存在する。主の臨在する場所にすべての人は招かれている。聖餐を受ける機会は過去の「ただ単に思い出」ではなく、現在におけるキリストの活動に与る招きであり、「恵みと憐れみは、私達に最初に与えられた時と同じように今も続いており、新しく、同じである」。この意味でラッテンベリーが、聖餐は聖餐受領者に福音を宣言しているのものであるという発言は正しく、また彼の主張である礼典的・福音的改革の統合という理解も評価できるものである⁶⁰。チルコートもウェスレー神学を「福音的」（神の恵みの言葉の再発見）と「聖餐的」（その恵みを経験する為の聖餐の礼典の再発見）なものの統合においてリヴァイヴァルが広がったとする⁶¹。しかし、筆者はもう一步進めてウェスレーは礼典を福音そのものとして見ていたと言っても過言ではないと

信じる。ウェスレーの聖餐理解を宣教的に再評価する責任を今日のわれわれは負っているのである。

（日本ナザレン教団・小岩キリスト教会牧師／東京基督教短期大学教授）

⁵⁸ Geoffery Wainwright, *Eucharist and Eschatology*, (Oxford University Press, 1981), p.130. ウェインライトは、終末論的な晩餐と終末論的な宣教との関係を述べている。

⁵⁹ 手紙 1767. 3. 5 To the Editor of Lloyd's Evening Post.

⁶⁰ Ernest Rattenbury, *The Eucharistic Hymns of John and Charles Wesley*, (OSL Publications, 1990), pp.146–154.

⁶¹ Paul Chilcote, *Wesleyan Tradition, A Paradigm for Renewal*, (Abingdon Press 2002), p.33.